

# 城北



令和3年7月1日現在  
総世帯数 3,742  
総人口 7,860  
男 3,749  
女 4,111



町会連合会  
会長  
細萱 志郎さん

就任4年目の会長としての抱負を聞きました。

「14町会がスムーズに活動できるように調整したいが、公民館の位置が地区の端にあるので、活動が難しい面もある。14町会が仲良く共有して、全体で解決したい。地区の方達がよく考えていて、町会長が率先してやられる人が多い」と、淡々と話されました。

城北地区の今の課題は、75歳以上の人が多く、40歳前後が多い町会もあること



町内公民館長会  
会長  
上原 偉敏さん

窪田前会長のもとで館長会

です。「若い人に負担のかからない方法を考える必要があり、高齢者同士がお互いに助け合える、住みよい町づくりの土台づくりを重点に活動しています」。

どんなことにも耳を傾け、城北地区のリーダーとして、時代の流れを的確に見据える細萱さんは「私たちは、住みよい地域とは、互いに手を差し伸べ合い、力を貸し合い、悲しみを分け合って生活する場所づくりであるとの思いで、これからも活動を続けてまいります」と、開館二十周年記念誌に載せています。若々しい感性で語ってくれました。

に携わってきましたが、今回、会長という大役を引き受けることとなりました。

任務の重さに耐えられるかどうか不安もありますが、各町会の館長さん方の指導をいただきながら進めて参りたいと思います。

公民館活動は、個人でも参加でき地域社会の中で活動している人たちの集まりでもあります。

お互い助け合い、支え合いながら安心して生き生きと暮らせる住みよい町づくりをめざす場でもあり、城北地区には、住みよい町づくり協議会が設立されて、安全の部会、健康の部会、福祉の部会の3ブロックがあり、それぞれのブロックごと活発に活動されています。

館長会の中で、各町会の活動報告をしながら意見交換をし、それぞれの町会が住んでいることに誇りをもてる町になるよう、町会連合会、町づくり協議会など関係諸団体と連携しながら進めていきたいと思っています。

## お詫びと訂正

5月30日号の公民館報「城北地区を支える役員の皆さん」の記事で、体育協会会長のお名前を誤って掲載してお

りました。正しくは、「体育協会会長 上原 偉敏」さんです。お詫びして訂正します。

## 手話講座



6月14日「サークルでんとうむし」の皆さんによる「手話講座」が、受講者20人を迎えて開かれました。はじめに砂原講師による「手話はみんなをつなぐ言葉」と題した手話披露があり、サークルメンバーの皆さんによる自己紹介。そして指文字を教える一人一人の自己紹介をしました。上手にできる人、四苦八苦する人さまざまで、苗字につく「山」



▲指文字を教わる参加者の皆さん

「川」「田」などよくある字は手を使って形を表現することを習い、続いて、簡単な挨拶の仕方に入りました。おはよう・こんにちは・こんばんは、などは、日常よく使う手の振りが手話と同じなので覚えやすかったです。他にも、バイバイ・やった！失敗の後の指鳴らしなど、気持ちが動くとも自然に動かし、身近に感じられました。最後に「ふるさと」を手話で歌って閉会となりました。だれでも覚えられ、外国語を習うよりもやさしい手話、あなたも手話を始めてみませんか？



▲手話で「ふるさと」を合唱

## ぐるっと城北 施設訪問

## 開智小学校

毎朝7時半から校門前で、教頭先生と一緒に、子ども達を笑顔で挨拶をして迎える校長玉水智香子先生は、4月から波田小学校より、転任して来ました。先日、話を伺いました。先生は以前開智小に勤めていた事があり、6年生を担当した時、地域の方に戦争の話聞き、劇を作り、城北公民館で上演した事が良い思い出として残っているとのことでした。



早く取材に応じてくださった玉水校長先生

児童の印象は、素直で真面目に何事にも一生懸命に取り組む、挨拶ができ、子どもらしい姿、また、保護者の方も協力的で、学校の方針を理解して見守ってくれ、PTA活動も積極的で有難いとのことでした。

今年度からタブレット活用の授業が始まり、児童ひとり一人にタブレット端末が配られ、5年生のクラスでは、沖縄や台湾の児童とオンライン

で対話をし、お互いに意見交換をしたそうです。

昨年はエアコンもなく、暑く大変な思いでしたが、今年からエアコンが全教室に設置され一安心です。

松本市の感染警戒レベルが4から3になったことにより、地域とのつながりでは、クラブ活動で、科学、手芸、囲碁、将棋、お琴の外部講師をお招きし、ご指導いただいているそうです。子ども達もとても楽しみにしているようです。

今年度、全校児童が集まれたのは校庭で、避難訓練の時だけとのことでした。

地域の皆さんには、回覧板を通して学級だより「開智のたから」を配布して理解を深めてほしいと願っています。

また、2年後に開校150周年を迎える時には何とかコロナ感染が収束して欲しいと、熱く語ってくれました。子ども達や、地域の皆さんへの思いを強く感じられた学



毎朝やさしい笑顔で子ども達を迎えます

## 温もりとふれあいの拠りどころ「ばらの湯」が閉店

5月17日、蟻ヶ崎東の銭湯「ばらの湯」が66年の歴史に幕を下ろしました。

昭和30年当時この一帯の畑地を所有していた初代店主の高橋省吾さんが建設創業し、昭和50年代に改築、今の建物・入湯設備になり、2代目令一さん・章子さんご夫妻に受け継がれ40年が経過しました。

ここは入浴温もりの場所だけでなく、蟻東町会にとって公民館ができるまで集会場所であり諸行事に利用する拠りどころでもありました。

そして今、40年を超す給湯設備を補修しながらの利用は、故障の不安を抱えての営業でしたが、客の減少に燃料の高騰が追い打ちを加え大規模改修もままならぬ状況となっていました。

入り口の扉に張り出された「17日までがんばりますが、老朽化のため営業する事が出来なくなりました。長い間ありがとうございました」と手短かに書かれた掲示には、切ない

万感の思いが込められているように、言葉の中から、長い年月をここで楽しく過ごした利用者達の胸をうちました。

閉店が報じられると、のれ

んをくぐって来た常連客達からの「長い間ありがとう」「ご苦労さまでした」「なくなってしまうのは淋しい」などの声掛けとともに「何とかこの銭湯を続けてもらえないか」など存続を願う声が多く寄せられました。

章子さんは、老人世帯や一人暮らしの人々にとって、手軽な拠りどころとして重宝されてきた銭湯がなくなってしまうことに「利用していただいた方々には申し訳ない思いで、いっぱいいます。切ないです」と語りました。「大きなお風呂・泡の出るお風呂・温まった後のコーヒー牛乳がおいしかった」などなど聖十字幼稚園の子ども達から寄せられた絵や思い出の作品を前に「子ども達の声がうれしくて涙が出ます」と、幾つかの思い出を話してくれました。



「あたかな思い出を語ってくれた章子さん」



創業当時の写真。華やかな利用者を迎えました。

## 街角トピックス



▲6月、田町町会のお宅ではバラが満開でした！

## 「日本のチロル」下栗の里 視察講座



▲ビューポイントから絶景を眺める参加者



▲「にほんの里100選」にも選ばれた下栗の里